以下の文章を読んで，それに続く問題に答えなさい。

先般，本学の試験を採点して，数百枚の「和文英訳」の採点をしゃかしゃかやっていたときのことである。

英訳すべき語のひとつに「姓をもたない漁師，万次郎」というものがあった。正解は Manjiro, a fisherman without family name. 。ところが Manjiro, a fisherman without sex. としている答案が出てきて私は驚倒(きょうとう)した。どうしてそんな訳になるのか見当もつかなかったからである。他の採点者の先生に指摘されて，やっと気がついた。

「姓」を「性」と読み違えたのである。

すごいね。

最初は「すっげー」とげらげら笑っていたのであるが，同じ答案が五枚，六枚と出てくるにつれて，少し青ざめてきた。

いまの受験生の中には「ジョン万次郎」(の話なんですよ，これが)を「ニューハーフ」というか「おすぎとピーコ」というか，そういうＴＶにじゃんじゃん出てくるキャラ「みたいな人なんだ」とすらっと納得してしまう人が少なからずおられるということである。

それはケアレスであるとか漢字が読めないということではなくて，「いまＴＶに出てくるみたいな人たち」が古今東西どこの社会にも存在している，ということを当然のこととする歴史感覚を逆照射している。

想像力というと，私たちはすぐに(『赤毛のアン』的な)自由自在に空想をたくましくするロマン的な能力だと思ってしまうけれど，私は想像力というのは，そういうものだとは思わない。想像力を発揮するというのは，むしろ知的で内省的な活動である。

その意味で，without sex という答案を書いた受験生は決して想像力が奔放なのではない。彼らが想像できる領域の中には「性のない人間」はいるが「姓のない人間」はいないからである。江戸時代まで，侍身分のもの以外は苗字帯刀(みょうじたいとう)が許されていなかったことを中学で習っているのだから，「姓のない人間」と「性のない人間」では，どちらが個体数が多かったかは容易に想像がつくはずである。それができな

かったということは，彼らはむしろいちじるしく「想像力を欠いている」と言わなければならない。

想像力というのは，「現実には見たことも聞いたこともないもの」を思い描く力である。そのためには，自分がいま見ているものは「見せられているもの」ではないのか，自分が想像できるものは「想像可能なものとして制度的に与えられているもの」ではないのかという疑念を抱き，そのフレームの「外部」に向けて必死にあがき出ようとする志向がなくてはすまされない。想像力を発揮するというのは，「奔放な空想を享受すること」ではなく，「自分が『奔放な空想』だと思っているものの貧しさと限界を気づかうこと」である。

しかし，それでも「人の身になってみる」想像力を発揮して，「他人にしてほしくないことは，他人にしない」ということを倫理の基礎づけとしようとする方が少なくない。

だが，そのような想像的共感が倫理を基礎づけることができるのだろうか？

ニーチェによれば，感情移入で基礎づけることができるのは「奴隷道徳」だけである。

それは「他人と同じようにふるまい，同じように感じ，同じように思考し，同じように欲望する」ことがニーチェのいう「畜群」の基本的なマナーだからである。

全員が全員の「身になって考える」ことができる社会とは，言い換えれば，全員がそれぞれの「同類」になっている社会である。みんなのっぺり同じような顔の人間がずらずらと並んでて，おたがいの気持ちが手に取るようにわかる社会。そこならたしかに感情移入は容易であろう。

だが，それをはたして人間が「倫理的に生きている」状態と呼びうるであろうか？

ホッブズやロックのようなイギリスの近代社会理論家たちとニーチェの違いは，「人間は他人の身になって考えることができる」という想像力を前者は「倫理」の基礎づけとし，ニーチェはそのような想像力こそが人間を「畜群」に陥らせるとみなしていたことにあった。

私はこの点についてはニーチェの洞察の方が深いと思う。

ただ，そのあとが問題だ。

ニーチェは「奴隷道徳」に対して「貴族道徳」というものを考案してみた。これは

「畜群」や「奴隷」を見ると「吐き気がする」という感覚のあり方を斥力(せきりょく)として，人間を向上させようという戦略である。

「げ，あんな連中といっしょにしてほしくないぜ」という嫌悪感をバネにして人間的成長をはかろうというのである。

論理的には整合的なのだが，『道徳の系譜』を書いたときにニーチェがまだ気づいていなかったことがあった。

それは，「畜群」というのは「畜群を見ると吐き気がする」というような「貴族のマネ」も簡単にできるタフな生物だった，ということである。

その一世紀後に「オレ，ニーチェ読んで，あのバカども殺さないかんつうことが分かったわけ」とほざく子どもたちが輩出するとは，かの天才も想像できなかったであろう。大衆はニーチェが思っているより「もっとバカ」だったのである。

その惨憺(さんたん)たる帰結はご存じのとおりである。

「大衆を嫌う」という感覚が大衆的に共有されている時代。それがニーチェ以後の大衆社会である。

だから，現代の大衆社会において，「大衆はさ……」というような口吻(こうふん)で語り出される言説にはいささかの警戒心が必要だ。マジョリティを批判する言説そのものがマジョリティに享受されている時代において，マジョリティについて語られていることば(例えば，いま私が書いているこのような言説そのもの)をどう批判的に読むか，というのは「メディア・リテラシー」のたいせつな課題だ。

またひとつ実例を挙げて考えてみたい。

ゆうべ，寝しなに読んだ村上龍『恋愛の格差』にたいへん印象的なフレーズがあったので，ちょっと長いけれど再録。

> わたしは常にマジョリティに対する不安と恐怖を抱いている。自分がマイノリティに属しているという自覚があるわけではないのだが，マジョリティがヒステリー状態に陥ったとき，自分は必ず攻撃されるという確信のようなものがあるからだ。その確信は，わたしが大前提的にマジョリティを嫌っていることに原因がある。(……)
>
> わたしがマジョリティを嫌悪するのは，真の多数派など存在しないのに，ある

限定された地域での，あるいは限定された価値観の中でのマジョリティというだけで，危機に陥った多数派は少数派を攻撃することがあるからだ。そしてマイノリティといわれる人々も，その少数派の枠内で，細かなランク付けをして，少数派同士で内部の少数派を攻撃することもある。

忘れることのできない写真がある。それは大戦前のドイツでユダヤ人たちがひざまずいて通りを歯ブラシで磨いているという写真だ。その人物がある宗教に属しているというだけで，その人物の人格や法的な立場とは関係なく差別するというのはもっとも恥ずべき行為だが，わたしたちは立場が危うくなるとそれを恥だと感じなくなる。

わたしはどんなことがあっても，宗教や信条の違いによって，他人をひざまずかせて通りを磨かせたりしたくない。それはわたしがヒューマニストだからというより，そういったことが合理的ではないというコンセンサスを作っておかないと，いつわたしがひざまずいて通りを磨くことになるとわからないからだ。

わたしたちは，状況が変化すればいつでもマイノリティにカテゴライズされてしまう可能性の中に生きている。だから常に想像力を巡らせ，マイノリティの人たちのことを考慮しなければならない。繰り返すがそれはヒューマニズムではない。わたしたち自身を救うための合理性なのだ(村上龍『恋愛の格差』青春出版社，二〇〇二年，二四七―九頁)。

村上龍のエッセイは現代日本社会のマジョリティに対する軽侮と嫌悪にあふれている。けれど，その村上龍のエッセイは彼が批判している当の現代日本社会のマジョリティにほとんど熱狂的に愛読されている。この「ねじれ」を私たちはどういうふうにときほぐすことができるだろうか。

この引用に限らず，村上龍が一貫して説いているのは，「倫理的に生きることは長い目で見れば経済合理性に合致している」ということである。これはレヴィ＝ストロースの構造人類学の知見とも平仄(ひょうそく)が合っている。

共同的に生きてゆく上でもっとも合理性の高い生き方を私たちの祖先は「倫理」と名づけた。

倫理は合理性の前にあるわけではない。むしろ，倫理にかなった生き方のことを

「合理的」と呼ぶのである。ことの順逆を間違えないようにしよう。

「倫理」の「倫」とは「相次序し，相対する関係のものをいう。類もその系統の語。全体が一の秩序をなす状態のもの」すなわち「共同体」のことである(白川静『字通』)。すなわち，「倫理」とは「共同体の規範」「人々がともに生きるための条理」のことである。

「それはヒューマニズムではない」と村上は書くが，「ことの条理」を「条理」として認知できる生物を「人間」と呼ぶのが本来の語の定義なのであるとすれば，「倫理」が「共同体にとっての合理性」のことである以上，「合理性と背馳(はいち)する倫理」というのは，原理的にはありえないはずである。

短期的には合理的だが，長期的には合理的でないふるまいというものがある。あるいは少数の人間だけが行う限り合理的だが，一定数以上が同調すると合理的ではないふるまいというものがある。

例えば，「他人の生命財産を自由に簒奪(さんだつ)してもよい」というルールは，力のあるものにとって短期的には合理的であるが，それが長期にわたって継続すると，最終的には「最強のひとり」にすべての富が集積して，彼以外の全員が死ぬか奴隷になるかして共同体は崩壊する。

子どもを育てることは女性の社会的活動にハンディを負わせる。だから，「私は子どもを産まない」という女性は他の女性よりも高い賃金，高い地位を得る可能性が高い。しかし，女性全員が社会的アチーブメントを求めて子どもを産むのを止めると，「社会」がなくなるので，賃金も地位も空語となる。

ある戦略が「長期的に継続しても合理的かどうか」「一定数以上の個体が採択した場合にも合理的かどうか」については，かならず損益分岐点が存在する。しかし，それを見切れるのは卓越した知性に限られており，私たちのような凡人にはなかなかむずかしい。

だから，共同体の合理性を配慮して，「長期的に継続した場合」や「一定数以上の個体が採択した場合」にはベネフィットよりもリスクが高くなるような生存戦略についてはこれをまとめて「非」としたのである。

だから倫理が「非」とするものの中には，「短期的にだけ行われた場合」や「一定数以下の個体しか行わない場合」には，ベネフィットの方が多いような行動も含まれている。

それゆえ，倫理に対する異議申し立てのほとんどすべては「短期的に見た場合」「自分だけがそれをした場合」には合理性にかなっているから，という論拠に基づいてなされることになる。

「人を殺してどうして悪いんですか」

と訊ねる子どもは，誰かが彼ののど元にナイフを当て，「ねえ，人を殺してどうして悪いんですか」とまわりの人間に訊ねているときにも，自分もその問いに唱和できるかどうかを想像していない。

ユダヤ人を迫害したドイツ人たちは，「ドイツ人だから」という理由で，ひざまずいて通りを歯ブラシで磨かされている自分の姿を想像していない。

倫理的でない人間というのは，「全員が自分みたいな人間ばかりになった社会」の風景を想像できない人間のことである。

村上龍の自省が彼に拍手する読者の自省よりも深いのは，彼が「社会全員が自分みたいな人間になったら，どうなるだろう？」という問いを自分に向けることを怠っていないからだ。

私たちが自分に課すべき倫理的規範はある意味で簡単なものである。

それは社会の全員が「自分みたいな人間」になっても，生きていけるような人間になることである。

そして，「人の身になって」想像力を発揮し，政治的正義を希求する人間の多くは，社会全部が「自分みたいな人間ばかり」になったとき，どんな気分になるだろうかということを想像したことがない。

私が自分の「仲間」として許容できるのは，「ウチダが何を考えているか知らないけれど，まあ，好きにしろよ」と言ってくれる人間，社会にいろいろなトラブルがあるときに，「悪いのは誰だ！」という他罰的な設問形式に固着することなく，「まあ，いろいろ困ったことはあるけれど，みんなでちょっとずつトラブルの責任を引き受けましょう」と言ってくれるような人間である。

「だから常に想像力を巡らせ，マイノリティの人たちのことを考慮しなければならない」と村上龍は結論している。この「マイノリティ」というのは，言い換えれば「よく分からない人間」のことであり，それを「考慮する」というのは「共感する」でも「理解する」でもなく，「よく分からない」けれど，「私はあなたの権利を守る」という言葉である。

逆説的に聞こえるかもしれないけれど，私たちが共同的に生きることができる人間というのは，私のことをすみずみまで理解し共感してくれる人間ではなく，私のことを理解もできないし，私の言動に共感もできないけれど，それでも「私はあなたの味方だよ」と言ってくれる人間のことなのである。

内田樹『街場の現代思想』(2004)より

問題1　大衆社会の特徴について説明しなさい。(600字以内)

問題2　あなたにとって「倫理的に生きる」とはどういうことか述べなさい。(900字以内)